



奇說排悶錄

後集

六

特別
21
2460
12上



門へE21  
號 2460  
卷 12-12

尾止

奇説排門録卷之十一

靈異之部

目錄

吳 二

雷 逆子

賣米者

雷 異 三條

博興女

陶 琰

命 保

非月録卷之十一

神告記

周侍御

謝在杭

義優

義虎

合十二種

奇説排門録卷之十一

靈異之部

吳二

六樹園翁 譯

吳二も母事へ至孝あり。夜夢み神告く曰。汝夙業みよ  
 しく明日雷に遭く死まべし。吳二母母の老たるを以て。救せ玉ひ  
 らんるを歎けし。神の曰。命を天に受逃るべからず。去玉。吳二  
 母の驚馬くるるを恐む。早朝に母に向て云る。兒他所に往んとも。母親  
 暫妹の家み往くわらせと云る。母許さず。然るに黒雲俄に起る。  
 雷聲おろくと鳴出し。吳二母を以て戸を閉させ。自田づらふ。母  
 罪を待時ふ。雲霽りけし。急歸て母を見えたる。尚敬馬た愁ん

夏を必ひく。其るを告ぐ。其夜又夢す。神来。曰。汝が至孝  
天と感ず。已に夙惡を赦し。王へり。告王ひたりと云。

雷殛逆子

常熟地の西北の地。逆子某と云者。康熙元年五月廿三日。田在て  
農業を成居。母向ふ女の家。住く。此日偶子の家。来  
け。娘迎て甚喜び。飯を煮。款し。留く。姑が帰る時。臨く。  
米穀升を送く。速に帰。王へ。夫。知。玉。別。母家  
を。路。子。往。遇。子。大。怒。母。の。米。指。盗。た。ん。と  
云。母。米。途。置。乃。六。子。竟。推。歸。尚。口。留。罵。往。  
か。る。後。雷。声。大。震。此。子。大。駭。妻。大。缸。を。り。我。を。蓋。へ。と

云。其妻従ふ。其身をばひ。雷。撃。死。る。

賣米者

清朝順治年。福州饑饉の時。晝錦坊。米を賣者あり。雷  
鳴。三人を撃死せり。其尸。文字を書し。其文字のさま。

六口月。六日。口月。六日。

か。ゆ。り。の。文字。と。云。を。識。る。人。之。を。萬。壽。塔。の。壁。に  
懸。置。る。夜。蜘蛛。の。糸。を。字。の中。に。垂。く。直。母。貫。て。下。が。り。  
之。を。視。る。米。中。用。水。康。中。用。木。查。と。云。  
文字。と。あり。其。人。の。平。日。を。詢。果。し。て。さ。る。者。共。り。と。ぞ。

雷異

新洲の楊姫と云ふ有り寡とありて一の孤と鞠とをこたたり。年三十二  
 成るに過ぎぬ。いよいよ妻を娶らば。姫夫の祀の絶んを懼て。さまぐ討と  
 媳を取んと欲すと聘し遣はた金も無けし。私に富家たるより。春を  
 ばた賃を申す。漸しく聘金とありて。始て子の為に婦を娶りけり。  
 此は共自願と富家の家も有て役を成して居る。婦門に入る夜姑  
 と索まじも入らざる。婚姻の禮を成さず。夫其故を語らば。婦泣て曰  
 妾囊中の金あり。姑を贖べしと云。夫夜富家と馳せ往るが。金を持  
 ちて。出たれば。かゝる婦あり。金を索む。婦已に金をばけし。付せりと云  
 夫大の愕のさす。言良あり。總て貧家の壁と皆葺き。いと編と

を鄰人竊み其語をばす。遂に謀て夫のまひり。金を取ると云ふ  
 多るりけむ。婦給と云ふを羞。且此外は金無けし。姑を贖はんと  
 無支を痛く。遂に縊て死す。時雷あり。金を盗める者を戶外に擊  
 殺す。金をばけし。死をあり。孝婦の氣絶す。其復甦するぞ。  
 興国洲と比丘尼あり。山中の池に入て浴居る。ふ悪少齋と脱衣を  
 を取て匿し。尼裸をば上る。成がごと。唯のまに居る。一の婦を  
 水と汲るが。文をば僧あり。と密ひて走て。外往を尼呼と救て。たんと  
 云ふ。婦尼あるるを知らず。我衣を脱と。尼も着せ。日暮近けし。已に宿へ  
 誘ひ。一夜留と歸し。婦の夫も此日外に在り。歸來るが。漸言知さ  
 児の父と向と。昨僧の此一宿と。と告。夫のて。姦夫を引入ると疑て

怒と婦を杖つ。婦の曰。彼を尼なり。某の日を期し。又來んとす。衣を乞ふ。歸さず。俟と。其實を知。玉へと云。尼を婦を。徳と。期日の彼衣を洗。謝を速と。歸ま。と。期せし。日の往。婦を尼が。夫。言。彼婦死。遂に縊て死。後の日。尼來て。途に在。時。或。曰。彼婦死。せり。汝。往。我。死。我。往。の。究明ら。能。其家。婦の尸。取。大。婦の側。同。縊。死。其夫。悔。白。疑。以。二命。救。自。害。死。然。初。衣。盗。者。誰。知。此。日。雷。一。少。年。を。擊。死。せ。が。

曉と。尼の。俸。死。觀。者。恐。豊城。不。孝。子。某。と。云。者。の。常。其。母。江。の。側。衣。を。搗。死。才。孫。不。意。背。負。肩。を。杵。を。揚。誤。兒。の。頭。を。打。死。母。大。惶。懼。里。の。家。往。不。孝。子。大。怒。日。母。吾。子。を。殺。せ。吾。母。と。せ。短。刀。を。袖。中。に。藏。め。置。往。言。母。を。引。契。て。歸。道。樹。の。下。至。樹。中。刀。を。抽。ん。と。入。樹。倉。て。其。子。を。動。能。救。半。日。雷。大。發。忽。不。孝。子。を。擊。死。此。三。條。皆。康。熙。八。年。乙。巳。の。夏。の。事。也。

博興女

妻の毒や げき  
常熟の逆子  
母を罵雷平  
うれ  
撃と死せ



華本緋像模写

博興各地の民は王氏の女箕まゝなるひぬ勢豪の何某其女を窺見  
 て一日女の姿を待つに掠て去るを知れ無うけり。家は連く往く  
 已たまふ為んとす共女泣啼く拒く従ひ之を縊り殺し尸を  
 石を繋ぎつけし門外あり流た淵に沈めたる。王氏女の目見えりけしを  
 所々覓けしにも知れず。計の施せられた方も無うりき。二日天が降るに雨降  
 て雷電其家を遠く霹靂大に作て龍下りし。主人の首を攫り  
 去りぬ天晴く見れば淵中の女の尸浮出たり。片手に人の頭を捉たり。  
 審み視まれば豪が首ありたり。官之と仰せ玉ひ其家人を責問ひ玉ひ  
 けし女を取来しを委し申すを龍も其女の化する所ある。天乃  
 遣る者ある。奇と云べし。

陶琰

絳州の陶琰と云人。及第。及第前。時。書を讀み寺院に  
 居り。偶室の方を回し見たり。僧婦を懐し抱て樂み居り。又  
 牙を回けし。僧ははげしき。かたトと名ひ。陶を追てき。出づ。  
 追て佛殿に至り。忽風大に起り。香の灰を吹きたり。僧の目被  
 か。僧大聲を發し。其黨を呼ぶ。陶秀才。を逃す事  
 あり。と呼ぶ。陶脱るべし。と思ふ。奔り鐘樓の方へ往り。樓下は年比  
 一鐘あり。地上に置たるあり。忽然と。此鐘自そり。少く上り  
 けし。陶鐘の下に鐘其地を付く。覆ひ隠し。僧遍索む  
 れども得ず。又鐘下に隠し。と。夢知らず。俄に陶が僕来り



向々僧已ぬ帰まると給きく帰ら。家人公のきり尋覓せども。跡も見えぬをせんま無臥る。其夜の夢の神。陶が在る所と示し玉ひ。早く救ふべしとわり。僕之を信せざりけ共。復の夜も同夢をんたり。衆を集く鐘を挙く見けし。陶恙無く在る。隠まし時より三日の成ぬ之を官ぬ訴けし。僧を罪せしとあり。陶琰を成化年辛丑の進士とあり。浙藩浙州のを歴く南大司馬名ぬ轉し。後仕を致し卒しぬ。少傳官を送り。茶少と謚せし一人あり。

俞保

萬曆年号の間解州ぬ俞保と云者。騰越の地ぬ戌卒。既ぬあり。とあり。往たり。妻の王氏粒米と信香と作し。日夜懇ぬ關聖の祠あり。

禱と。夫の歸を來んると乞ふ一年餘のり。俞保衆と共ぬ居る。關聖夢ぬ告ぐ。曰爾が婦女が為ぬ度と禱る故ぬ我此ぬ來たり。爾歸らんと欲するこのを。俞保地に伏し歸るるを願ふ。我ぬと非ず馬ぬ後と馳往る。猛き風ぬ吹送らる。平沙の柳林の中。後々。よく視し。解州の城外あり。家ぬ抵し門を叩け。王氏疑し。明ぬ具ぬ來る故を告ぐ。戸を開く。夫婦相抱く痛く哭ぬ。をぬ關廟に詣り謝をあり。翌日府ぬ出く言し。けし。移文ぬ越え送る之を察する。其日ぬ俞保伍を離れ。僅一日あり。又輝籍ぬ關聖免句ぬあり。の四字ぬりた。と告ぐ。せし。州尹之と奇し。俞保竟ぬ免るるを得たり。王氏詩と作て曰

信一香 一粒一采  
一香 一照一淚

客路萬重山  
流恨入蕭關

神告記

康熙十六年三月。安西各名地の賈人魏丙と云者上海各郡の市ゆく布を買て  
夜旅店に宿りて酔り臥たり。此夜風雨は降りし。其寮の藏する金三百  
兩を失ひつ。店主人命甲と云。昨日金と買つる布の數を改めさせし。用  
更わりて昨夜近郷へ出往ぬ。其弟愈乙と云者。留王を守て在る。此  
於て官の訟多ふ。捕人来て賊の入り所を驗むる。入る穴も見えず。其  
おる門より遁しと口をえたまふ。外より入し賊も亦とく。命乙の疑ひ  
うらぬ。命乙せんまあて。梁の楫りて。經る舌をせし。苦なるを人々

救て甦る。夏をぬり。上海の冷任君と云ふ人。賢めし。獄を断  
玉ひたり。此人々を度み居り。鞠一玉の一人を繼たるを救て息をさぐる  
病人ぬり。竹輿のまゝ昇入つ。刑を施し。拷問す。死者非お。賈人の  
有限の金を失く。哀痛が。鐵る猿の如し。冷はる。此二人乃  
者生死計難し。然るに拷問して肌膚を断骨肉を折ても白杖をさ  
げ。其然れ共。今推て之を求めん。ゆ損ふ所甚多。うん。萬一其實を  
るむん。自今以往罪あ。して害を受る者。此二人の止むと。その  
やまらぬ。久く。先命とく。昇出させ遣たり。令其より。城隍廟に詣  
て神を禱す。寔を告させ玉ひねと請ふ。百はれし。捕人と留る。神の  
命を授けし。寢宮に留り。歸玉ひぬ。寢宮と神殿の後み。在る。唯

慢揮施巾孟屏几の類と羅列まろろの。生る人の知くして座位を  
 虚せり。時め十九日あり。捕人寢宮の下伏く夢心地みひるる。此  
 座位の上の神の至り居玉あるべしと待つ待けとも神至らば。暫  
 わりと女の童の出く呼て曰神已ぬ縣ぬ詣り玉への衣を留て汝ぬ賜りと  
 云つ。右手ぬ初き女子を抱きあがら。左手ぬ衣をぬりく與へり。取く視まを  
 裙欄ありと夢さる。捕人歸て令ぬ告るる。令も又此夜夢見るる。神  
 撲頭緋衣を着く腕とさるる。已ぬ賊を得くとも。君りまも知らむを  
 との玉ふ。前ぬ捕人ぬ告く神の縣ぬ至り玉への衣の夢中ぬ神  
 の至り玉ふと云るる。夜明て賈人令ぬ庭ぬ至りく申す。昨夜賊  
 金百兩と旅舎の内ぬ投入つと訟ふ。令政も愈乙が罪を情まも。好金を

還つるるん共疑ひひと。捕人の語を以て首を俯し。再四考て曰  
 衣と賜と云て裙欄を與り。裙欄も衣ぬ非ず。衣ぬ非ざるを裴の字あり。  
 若裴姓の人の此が近鄰に在りや。捕人叩頭して曰周の左ぬ裴裴と  
 云者侯ぬ無厲ぬ。家産と事とせす。其者旅舎の備に在り。常  
 ん旅舎ぬも出入りも者あり。此裴姓ぬ侯べしと云ふ。令曰然らん。  
 夢中ぬ少女と抱りて云ぬ少女と愛女あり。吾周納音の敷陽姓と  
 左に從り。今非衣を左ぬ。愛女と右にせるる。裴裴愛するの疑無し。  
 然も共吾惧ぬ私の臆を以て人を殺め入るとん。哀を云て之を踪跡す。是  
 とも實を得るる。又捕人ぬ希して神宮ぬ候し。捕人復夢む  
 寢宮の下伏し。一吏ぬ呼て曰神至り。扱其虚位の處に

あり王のく。巴ま。復入玉。前の婦又出。敗たる禪を持出。捕人又與へ米筐を以て少僕。老僕隨て太ら。捕人又。今日禪と與る。果。衣。非。敗。已。露。米。八十八。禮。凡。出。老。先。今。少。者。繼。出。賊。敗。金。八十八。出。續。出。人。裴。收。之。拷。問。白。狀。日。風。雨。旅。店。入。て。匿。金。を。盗。十九。日。至。夢。神。勅。金。を。還。す。と。の。依。て。金。百。兩。を。其。舎。に。投。入。今。八十八。兩。を。中。に。置。り。餘。を。皆。家。に。在。と。云。云。見。み。り。洋。を。搜。し。金。を。得。り。收。招。狀。を。定。め。餘。金。の。全。う。と。取。た。と。任。君。其。性。正。直。の。神。慮。の。合。

之を禱る。誠有て。生と好の徳を以て鬼神を感せり。求め。其。志。を。得。り。其。裁。断。の。明。哲。を。周。官。の。掌。夢。の。秘。を。得。り。周。禮。の。書。中。に。云。る。掌。夢。の。秘。事。と。い。ふ。と。云。ん。学。問。の。功。ゆ。も。寄。る。と。云。ん。天。性。清。潔。を。嗜。慾。を。去。り。故。に。神。の。其。智。を。啓。く。事。斯。の。如。し。初。て。官。に。蒞。む。時。七。月。二十。五。日。あ。り。之。日。を。過。し。民。家。に。火。を。失。し。大。風。大。に。起。り。燎。る。事。箕。を。揚。る。如。し。任。君。竊。み。多。く。我。此。所。に。令。と。成。て。初。め。斯。る。蓄。有。と。我。不。徳。あり。と。徒。歩。り。往。て。火。の。所。を。拜。し。泥。の。為。と。衣。を。汚。し。て。の。り。け。風。止。さ。る。火。忽。ち。消。ぬ。是。神。の。感。亦。ち。所。を。登。し。任。君。名。も。辰。旦。字。も。待。庵。蕭。山。の。人。あり。丁。未。の。年。の。進。士。あり。

周侍御

明の天啓年（一六二一）の時、御史周公宗建と云人屢魏闖（魏の代の）と誅せん  
 と。上疏（奏）しと申し、其職を奪つと蕃まき。声と答ふ、其能  
 へば至らざる。許頭純と云、若公に向て声と厲して曰、今の時不當て  
 魏上公と詈む。二丁と識らざる愚人ありと云、公竟獄中めと斃ぬ。  
 公六月獄に沈み、七月尸を還し至らる。家中の若公の死せざるを怨る  
 者あり。時、清江浦（浦名）舟子あり。一人の常あたる人來て舟を雇ふ。  
 舟子其人の姓氏を問、何もの所より來玉あぬと云へ、其人の曰、我を  
 周季侯あり。京師より來つと云ふ。舟子曰、吳中（吳國）の諸公の追捕せられ  
 ても有と承ふぬ。いんと問へ、慚感て皆死せりと云ふ。又魏監いのふ  
 と問へ、曰、彼が罪惡貫盈せり。久しかりて戮せらるべしと云。舟

と漕ぐ、吳江に至る。其人門に入り、舟子之を呼け、家人  
 出來て其故を問く。季侯も吾主人あり。召さるる京に在り。何ぞ  
 歸玉へんかと。喧く争わぬ。夫人急し出て曰、良ぬ是夏あり。昨夢  
 侍御の家を還り玉ひと。備し死せるを告玉ひ、且のさすひける。若  
 上帝我忠を鑒玉ひ、直ぬ神と為玉ひ。吳郡の舟子、一金を與へる。せ  
 許せり。我為之を酬せし。信を失ふの事あること。のさすひきと云て、金を  
 舟に載し、一生の奇事あり。争此金を受べ死と云ふ。夫人の曰、侍御  
 平生清人あり。性よく寛せり。汝受ざるを其心背なりと云ふ。舟人拜  
 し、金を受て去けり。

義優閑羽  
打拵て羅俊  
名少鬼の寛  
を雪ぐ



華本繪像模寫



謝在杭

謝在杭肇淞也。閩<sup>名</sup>園<sup>名</sup>の長樂<sup>名</sup>地<sup>名</sup>の人あり。少き時邑の蕭氏が園めて書と讀む。此園久く怪物出ると居者無りける。謝在杭之を信せむ。或夜燈下坐し居る。忽一の女子前來て拜し泣き。謝在杭之を叱りて女子の曰。妾冤を負事久し。公を求て之と申んとも。魅火非む。妾を湖州德清<sup>名</sup>地<sup>名</sup>の人あり。幼して父は隨て此の客と成る時同行の者。某甲と云者中表戚あり。父の囊橐を利し。遂に父を殺せり。妾が官司を訟へん。復と恐と併て共殺し。今數年を経ぬ。公他日必胡<sup>名</sup>官<sup>名</sup>たるべし。望く甲を執て罪を行ひ。妾父子を死せしむ。と我家の管遺玉の父子死し。恐無うんと云てさめぐと泣く。謝

在杭之を許諾し。復如く出宗まらる。あまこと戒む。是より竟に怪出らる。其年謝在杭郷試の中。果しく湖州の推官<sup>名</sup>なり。任に抵て即甲を捕へ。さす。一に訊て立ぶ。罪の伏し。遂に刑せしむ。郡人之と神ありと稱し。たり。

義優

義優を姓名と知る。明の萬曆<sup>年</sup>の向吳門<sup>名</sup>地<sup>名</sup>に在て演劇せり。諸伶相謂て曰。傳て安を某の家。樓の宿まる者。忽死すと聞く。今夜彼處に往て能宿まる者。酒を以て賞ま。と云ふ。大淨亟に我往。と云る。已う。又變して往へ。と云ふ。小生副末も我往て見ん。と云う。が思ひ。是も往復を止めぬ。大淨曰。

然るを三人同行を可あらんやと云へを衆人見よゆゆを可らん  
とて勧め遣る。大浄を關公よ扮し。小生を關平よ扮し。副末を周  
倉よ扮し。大江東と云謡物を唱へて。往衆人此扮と云んを。崇再  
考るの非トと云。三人樓上より坐して居る。江頭の下に哀げ  
る声して哭声しるが。哭声止めと云ふ。涙と樓の階子と登りて  
ぞ来る。之と云んを首無死屍の両手もく其顛を掣たり。前來と  
拜し跪ぬ小生。副末心慄でせんすと知る。大浄獨喝して汝何  
より来たる若ぞと云へを。曰冤鬼あり。元來江西饒州府の德安縣の  
人ゆ。羅俊名と云者あり。二十六年以前米三百五十石と楓橋あり  
異觀海各の賣て。銀五百兩を取る所。觀海我と我侯ぬと云。大浄云

汝の冤理有り然れ共何れ依て其實を知らんと云。曰觀海が家  
人吳富揚云と云る者。二人助け我を殺し。屍を梯下小瘞め。大石  
と用て横さすを覆さる。大聖請憐て推計王。大浄云。汝既冤を負  
然る他他人の祟を成すゆふと向へを。曰葉く我枉死を人よ若んと  
まま共意のさるめ皆人怖ま。自死せり。我罪非ず。大浄云。彼を  
法に實かむ。汝が冤を雪つる。汝姑怒を息て待べ。慎で形を頭  
しと人を害し。天紀を于まら。かきこと云へ。命の如くまら。と云。と  
まぬ。大浄二人を戒て。曰此の倘渡る必屍を毀て跡無くや成さん。  
然る此鬼と約せるを負えんと云ふ。翼日製優酒を買て三人飲む。  
夜中の事と受けを。唯鬼の泣声のしつと符合て其子細を言ふ。其



程かく大巡初て蘇ぬ北位王なる小撫君宴を范公祠に設けり。大巡も名使に獲刑へ入ぬ。所の奉納の馳走する。時大淨其席に在るが。其時大淨も其席に在るを撫君と所を奉納せし。忽指を嚙て血と面を汚て。まわくと席上ぬ起て。よりまわりのかき。

二公め向て語て日本郡に宛めく死せる若ありと天に。此關某關羽の靈の天勅を受けて二大人をく宛と雪めん。二公大に愕て謹で教を受んと云ふ。大淨曰。事洩れん。恐ろしくおせんと云へ。二公大巡と撫君と。二公と云ふあり。舌を嚙て鮮血を嘔暈さるる。二公密に丁壯二百人を遣り。觀海が家と圍ませ。并に吳富楊三を擒て。二公訊王ひくれが。皆有し。

白状す。扱屍を發て。奪はる銀を數の如く。庫に貯る。三人の者皆辜伏しぬ。郡中尋て二公を稱する。神の如く。大淨終の語を洩さ。鬼の冤を雪ぎぬ。真の智勇の人と云べし。

義虎

荆溪ふ二人の竹馬の友あり。及て一人を富一人を貧なり。貧人は其の技無く。唯書教を知るのみ。妻も貌羨りけ。富人謀を殺て貧人に向て云。汝が貧斯の如し。何ぞ浴はんるを圖ざるや。貧人圖竟とあるに死無しと云へ。富人富某山に隠る。其甲ある人財豊あるが。主計吏より不見る。

汝が才此に應はり。汝可と必り。我為之と策らんと云ぬ。貧人辱し  
 と謝しけしを。富人即舟と具へ婦を載せて往ぬ。其の山の  
 下舟着けしを。富人云我汝が事といまご某の語も。然る夫婦  
 往まごち往あを彼が公と忤るやわらん。一び忤る復進むるが  
 汝が内を舟に留め置て。吾と汝と先往て計るべしと云けし。貧人  
 之に従ひて。借入山に登り往く。富人むらうが路を回す。引く  
 險に於て溪林の中を往く。貧人解履破す。血踵より流る。極める寂  
 き所に至りて。一足ぬ貧人を蹴仆して腰を鉞をかくして斫る。扱  
 息絶ぬと思て。彼と返して山下下り。舟に至りて。婦に向て。汝が夫并に  
 山中ゆく虎は。噛まぬ之をいふせんと云へ。婦大に驚て泣く。富人

今と歎く共のあり。吾試み汝と同じ往て。屍をいん。其上ゆく兎も  
 角も討へべしと云ふ。婦之に従て。借入山に上る。富人引往て別の  
 險ある溪林の中の寂し虎處に至りて。抱きまて之を淫せんとす。婦  
 之を咄も中らぬをうらう。忽林中より虎躍出。大に哮て前を来て。富  
 人を噛く。欠がく。るが。女を噛殺して。婦驚きわされ。が。  
 公と定め。彼山中の路を知りあが。斯るめをいん。我夫果して虎の腹  
 中に入らちらん。とゆひ。牙を轉して山を下らんとする。路都す。一  
 て往迷ひて。哭々たどりたる處。人の歩す。ゆる女の斯る山に在ると  
 問ふ。婦委く其由を陳けし。其人曰。汝哭く。哀れ。汝を送て舟に  
 乗ら。と云て。先まごち導往て。彼に汝が舟わりと教て。勿心然

とて消失たり。此神の助玉へるありべし。婦舟の登けきごとものいふ共  
 為せ死方無く。忙然として居るふ山中より人の哭つ来る者わむ。  
 遙のふふ夫の似たり。婦疑ひ異て居るふ夫も亦思々々。我婦賊の収  
 らまざるべし。何ぞ獨舟の在るやと疑て。相近はたなく。且且を婦ちり。相携  
 て大ぬ働て各其さすを語りぬ夫曰彼汝を淫せんとして未淫せむ我を  
 殺さんとして我死せむ。我然むむと所無しと云む。婦曰吾君死せりと  
 多ひつるふ死ふ玉の。賊の報へんとするふ自報を成し。我も亦憾むべ死  
 事無しと云て。夫婦悲みく慰む。又哭く笑ひ諸共其家の歸ふ



奇説排門録卷之十一大尾

東都書肆中金堂藏板書目

椿説弓張月

五編揃 三十卷 前北齋画

夢想兵衛胡蝶物語

前後九卷 全 歌川豊廣画

隅田川梅柳新書

六卷 全 前北齋画

稚枝鳩

五卷 全 歌川豊國画

勸善常世物語

五卷 全 溪齋英泉画

曲亭水滸傳

五編揃 廿五卷 全 歌川國安画

優暈華物語 八卷 山東京傳作 可菴武清画

金鈴橘草紙 全五卷 古實物語 全六卷

旬殿實實記 三編 十五卷 曲亭馬琴作 歌川豐廣画

絲櫻春蝶奇縁 前後十卷 全全 画作

血血郷談 八卷 全 前北齋 画作

右旬殿實實記以下の三部は先年祝融の火に罹りて。版木灰燼となりし事。千今十有餘年。ある家に彼翁丹誠の筆頭微妙の巧小しく古今に傑出せるものあり。看す欲する人年々多し。あふむて這回尚校正を加え再刻發市近きふり。四方の首官唐驚の日を待て需めん」と願ふの事。板中金堂欽白

頼豪阿闍梨怪白鼠傳 前後十卷 曲亭馬琴作 葛飾北齋画

四天王剽盜異録 前後十卷 曲亭馬琴作 歌川豊國画

うとふ安方忠義傳 前後八卷 山東京傳作 歌川豊國画

繪本淺間ヶ嶽 前後九卷 柳亭種彦作 蘭齋北嵩画

霜夜乃星 全五卷 柳亭種彦作 葛飾北齋画

右之外諸家隨筆物あり。和漢の軍記実録あり。ひま上代物語乃そをい何は

東都書肆 中金堂 西國米澤町三丁目 入金屋又兵衛板

相馬日記

全四冊

高田典清稿  
北條時鄰注

新著聞集全八冊

その作者と詳しきこと  
其文雅なりて叙小同離せし珍奇  
妙筆実不徒著聞の冠と云ふなり

橘菴漫筆

前編四冊  
後編四冊

田仲宣述

三養雜記

全四冊

山崎美成著

京襍乃記

全三冊

曲亭馬琴作

東都書肆

西國米澤町三丁目、金屋又兵衛版

心齋橋通り北久太郎町

同

轉  
勞町

河内屋喜兵衛

同

河内屋茂兵衛

同

南久室寺町

柏原屋儀兵衛

同

南久太郎町

河内屋源七郎

同

轉  
勞町

秋田屋市兵衛

西國米澤町三丁目

釜

屋又兵衛版

大坂書林

江戸書林

